



＊第45回＊

二瓶友美

テレビ朝日

夢変更は大成功！？

国語の答えは一つじゃない

小学5年生の国語の授業。その日は詩の学習でした。先生の、「最後に出てくる“星”は、どんな星だったのだろう」という質問に、Aさんが答えました。先生は、「そうだね、そういう星だよ」と。でも私はそうとは思えず、挙手をして自分の考えを伝えました。すると先生は、引きつりながら、「そっかあ。でもAさんが言ったような星だったと先生は思うなあ」と。私は心の中で、(…この詩の作者に聞いてきたの？じゃなかったら、本当にそれが答えだなんて言えないじゃない…)と思いました。その後、中学生になっても高校生になっても、(…きっとテストでは〇〇が正解なんだろうな。でも私はそうは思わない…)ということが多かったのです。

運命の職業雑誌

そんな状態で、国語にはどうも拒否反応を示してしまい、(白黒ハッキリする理数系の方がどちらかと言えば好きかな、でもやっぱり音楽が1番！)と思っていた高校2年生。3年生は文理クラスが分かれるので、希望を出さなくてはなりません。ふと教室の本棚に置いてあった、「この職業ならこの学部」といった雑誌が目に入り、手に取りました。(将来何になろうかなあ。私が好きなのは音楽！作曲家？う～

↑株式会社テレビ朝日

"Is a Dream Change a Great Success?!" by Yumi Nihei (TV-asahi Corporation, Tokyo)

ん違うなあ。でも音に関係する仕事がいいなあ。)なんて思いながら読み進めると、目に入った「ミキサー」という職業。(ミキサーかあ…うん！これになりたい！何々！？ミキサーになるには、工学部か理工学部か。よし！理系にしよう！！)その瞬間、私の進路が決まりました。この雑誌が、私の人生を決めたといっても過言ではないでしょう。

ぶれなかった大学時代

大学に入学すると、憧れだった軽音楽部へ入部。工学部はもともと職業で選んだ学部だったため、授業にそれほど魅力を感じることもなく、ひたすら軽音楽にのめりこみました。ますます音に興味を持ち、「ミキサー」への思いは膨らむばかり。ミキサーになれるのは、テレビ局、ラジオ局、レコード会社…。最初に試験のあったテレビ局から挑戦し、テレビ朝日に入社することができたのです！！

テレビはやっぱりカメラじゃない？

技術局に配属されると、カメラ、VE、照明、マスター、回線、送信、そしてミキサーがいる音声！と、局内のすべての職種について研修を受けました。1週間の研修を終えた時、私の心に、信じられない思いが芽生えたのです。(テレビは、やっぱりカメラなんじゃない？)5年半持ち続けたミキサーへの熱い思いは、たった一週間で消えてしまったのでした。

嘘から出たまこと

上司との配属の面談で、希望を聞かれ、「カメラマンになりたいです」と答えた私。「酒は飲めるか？カメラマンは飲めないとつらいぞ！」と。学生時代はお酒に弱かったのですが、カメラマンになりたい一心で、「飲めます！強い方です！！」とうそをついてしまったのです。それが決めてとなったのかはわかりませんが、私は希望通り、カメラマンの部署「撮像」へ配属されることになりました。

当時撮像では、番組収録が終わった後は毎回と言っていいほど、お酒を飲みながらの反省会が行われていました。飲めます！と言った手前、飲めませんとも言えず、一緒に飲みながら、カメラの撮り方、番組への取り組み姿勢、作品の評価など、先輩方から日々指導を受け、少しずつカメラマンとして成長することができたのではないかと思います。そしてなんと！お酒も、いつしかかなり飲めるようになっていたのです。

女性だからこそ

今でこそ、女性カメラマンも女性ミキサーもたくさんいますが、その頃のテレビ局の現場は、まだまだ男性社会でした。ディレクターからは、ちやほやされたり、逆に「女となんか仕事したくない」と拒否されたりすることも。女性と見られないように髪を短く切ってみたり、言葉遣いを男性っぽくしてみたり。ガチガチになって必死でした。





先輩カメラマンのアシスタントとして中継車屋根へ（髪を切ってふんばっていた頃）。

でもあるとき思ったのです。私はどんなにがんばっても男性になることはできない。無理に男性の真似をするのではなく、女性だからこそできることを活かせばいいのではないかと。今思えば、厳しいながらも温かい撮影の先輩達は、言葉に出さずともその生き様で、そう私に気づかせてくれたのでしょう。

カメラマンの醍醐味

私の目の前で起きているすべてをそのままテレビの前にいるみなさんに伝えたい。カメラをやりながら、感動で泣いてしまったこともあります。あまりにもおかしくて笑ってしまいカメラが揺れてしまったこともあります。でもそれらの感動や笑いは、カメラの撮り方一つで半減してしまう可能性もあるのです。カメラの前の俳優さんやアーティストさんの魅力を伝えるにはどう撮ったらいいか、いつも勝負でした。タレントさんと息が合い、いい画が撮

れて、収録後「ありがとう！」なんて言われた時は涙がでるほどうれしかったです。逆にうまく表現できなかった時は、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。特に生放送は、修正が効かない一発勝負です。本番直前は、とてつもない緊張感でもう2度とやりたくないと思うのですが、本番後はへとへとになりながらも、大きな達成感に包まれ、早く次をやりたい！と思ってしまふのです。

カメラマンを活かすも殺すも スイッチャー次第

そうやって、カメラマンが全力で取り出した画を最終的にテレビの前のみなさんへ送りだすのがスイッチャーです。また、カメラマンが気持ちよく画を撮れるのか、イライラしながらなのか。もちろんイライラしながら撮った画はいいものではなく、番組の質が落ちてしまいます。すべてはスイッチャー次第なのです。責任重大です。だからこそ、カメラマンたちとスイッチャーがうまくキャッチボールしながら番組を創ることができたときは最高です。私がスイッチャー全盛期だった頃は、まだ子供はいませんでした。いつも母のような気持ちでスイッチしていました。子供たち（カメラマン）がどうすれば、最高の画をとれるのかを考えながらスイッチング。みんなで気持ちよく収録を終えたあとは、興奮が冷めることなくそのまま恒例のお酒を飲みながらの反省会。「あのタイミング

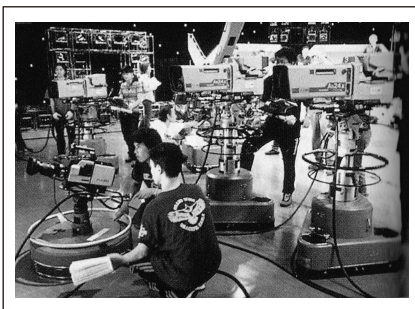
で、あの画撮ってくれてうれしかった！」「どうして、いい画撮ってたのにスイッチしてくれなかったの？」カメラマンとスイッチャーがお互い褒め合ったり、文句を言い合ったり。そして次の収録にはさらに絆が深まりもったいい作品ができあがっていくのです。

これからの人生は 家族のために

撮像でがむしゃらにカメラやスイッチャーをやっていると、いつのまにか30代半ばになっていました。入社して10数年、仕事に時間のほとんどを捧げてきました。それが自分にとって1番幸せだったからです。でもそろそろ、子供も作って、家族のためにも自分の時間を使いたい。そう思うようになりました。そして数年後私は妊娠し、現場を離れました。産休に入る前日まで、さすがにカメラはできませんでしたが、スイッチャーの仕事はしておりましたが、そうさせてくださっていた周りの方々には、今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

アナログな私がIT???

休職復職を繰り返し2人を出産。その後しばらくして、IT部門へ異動になりました。当時私は超アナログ人間でした。プレゼンを行うときに使用するのは、PowerPointではなく、模造紙だったくらいです。パソコンを使った作業も苦手で、EXCELやWordは後輩に教えてもらいながら、やっと使って



5人のカメラマンが息を合わせて映像を作り上げる「ミュージックステーション」（筆者は1番左のカメラ）。



カメラマンからのメッセージを受け止めてスイッチ。



産休に入る前日の生放送本番前。お腹が卓につかえながらも、最後までスイッチャーをやらせてもらった。



サービスセンタースタッフと（筆者は後列左から2番目）。

おりました。ITなんて、私から1番遠い世界と思っていたのに、まさか私がそこへ異動だなんて。

私が就任したのは、サービスセンターなどで局内のIT系のサポートをする、「iさぼ」というチームのプロジェクトマネージャでした。iさぼの会議に出席すると、IT用語が飛び交い、何を言っているのかさっぱりわからず。（何で日本人なのに、日本語使わないの?? いいおじさんが「来週の打合せはスキップします」って。可笑しすぎる!）なんて心の中でいつも思っていました。ここで私はやっていけるのかと不安でいっぱいでしたが、あったのです。アナログな私が役立つことが。

実はテレビ局には、私のようなアナログ人間がたくさんいます。それなのにサービスセンターのホームページには、IT用語がいっぱいで、アナログ人間には理解できませんでした。サービスセンターには、便利なシステムがたくさんあったのに、そんな理由で普及率が非常に低かったのです。そこで私の出番です！ IT用語をアナログチックに翻訳しまくりました。

サービスセンターのスタッフたちは、ずっとITの世界にいたので、IT用語は自然な言葉で、だれもが理解していると思い込んでしまっていたようです。そうではないということを理解してくれたのちは、率先して自ら誰もがわかりやすい表現をしてくれるようになりました。

ある日、システムに障害が発生し、サービスセンターのスタッフへ指示を

出していたのですが、ふと（この感じ、なんか懐かしい）と思ったのです。それは生放送のスイッチをやっている時の感覚でした。ユーザへの影響を極力少なくするように、瞬時にさまざまなことを判断し指示しなくてはならない。スピード感が求められます。これはまさに生放送時の判断と一緒だったのです。過去の経験が生かされた瞬間でした。それまでは、放送系とIT系は、まったく違う別物として業務してまいりましたが、実はつながるところもあるので、お互いのいいところをそれぞれ採用することで相乗効果が得られるのではないかと、両方を知る自分を最大限に活かして奔走した4年間でした。

とりあえず技術業務部へ

2018年7月、2度目の人事異動がありました。今度は「技術業務部」です。技術局のスタッフが、安全に気持ちよく仕事ができる環境を作り、他部署に対しては窓口となり、そしてお金の管理をするところです。

タイトルの写真は、技術業務部っぽいスタイルってどんなだろうと考え、災害発生時に、局員を安全な場所へ誘導する際に着用するオレンジのビブスとヘルメットを着用し、経費計算で使用する電卓を片手に持ってみました。そして、局員が元気に活躍するよう、太陽に向かってお願いしています！

仕事をしていると、悩み事や、納得のいかないことができたりしますが、そんなときはとりあえず業務部へ行こうと思ってくれるように、そんな雰囲気づくりにいつもこころがけています。他局から技術局への依頼対応についても同様に考え、日々過ごしています。

また働き方改革についても、テレワークの実施、ペーパーレス化等、業務効率化とワークバランスを考えて、業務部が中心となって行っています。

次の写真は、カメラマンとして一番脂の乗っていた頃のものです。番組の仕事はハードですが、非常にやりがいがありました。こんなに楽しいことを



カメラマン全盛期の時

してお金をもらっていいのだろうかと思っていたほどです。

今の私は、表に立つのではなく、裏からそういった人たちを支える役目にあります。カメラマンの頃とは正反対です。つまらない? いいえ。楽しいのです。表に立つ人たちが活躍することを支えることに喜びを感じます。これもスイッチャーの時と一緒に母の気持ちなのでしょう。母性本能が強いのかもかもしれませんね（笑）。

私ってリケジョ？

さて、これを読んでくださっているあなたもすでに疑問に思っているかもしれませんが、私ってリケジョなのでしょうか？ 確かに、国語よりは算数が好きで、大学は工学部を卒業しておりますが、これまでやってきたことは理系っぽくなかったような…。

リケジョだったかどうかは謎ですが、男性社会とよばれるところに飛び込み、鍛えられてきたことにより、人としても少しずつ成長しながら、自分になかったたくさんのものを得てきたことは確かです。これらは人生の数々の場面で活かされています。

会社生活も、半分以上すぎたでしょうか。今までお世話になった先輩方に感謝しながら、その分後輩に返すべく、これからも二瓶印の足跡を残していけたらと思います。（2019年3月29日受付）